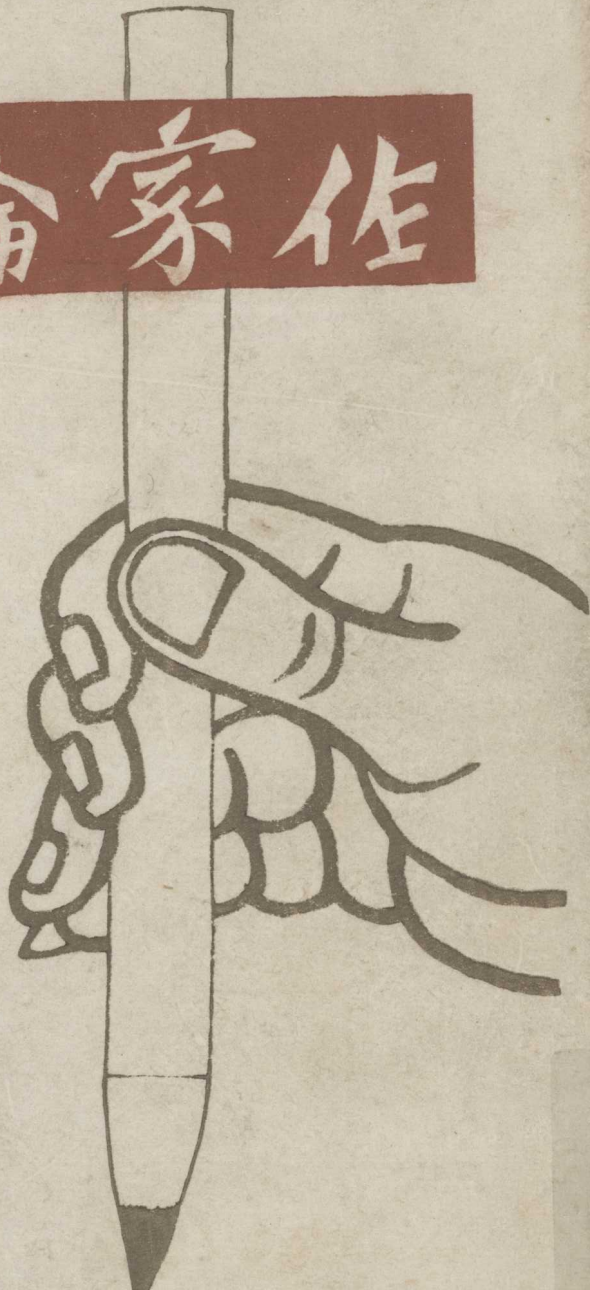


作家論

伊藤信吉著



作家論



伊藤藤子著

昭和十七年六月十四日印
昭和十七年六月十七日發行

定價二圓五十錢

著者

伊藤 信吉
いと う しん きち

發行者

東京市芝區新橋七ノ十
高橋 敦
たか はし じゅん

發行所

利根書房
りね しょぼう

東京市芝區新橋七ノ十

電話 芝二四六〇番
振替東京一七二六八六番

——論 家 作——

配給元

日本出版配給株式會社

東京市神田區淡路町二ノ九

印刷所 森島兩友堂

東京市麻布區宮村町七八

代表者 森島金泊郎

日本出版文化協會會員番號 一二〇〇三大番

作家論・目次

葛西善藏……………一五

武者小路實篤……………一七

正宗白鳥……………一八

島崎藤村……………二九

夏目漱石……………三三

二葉亭四迷……………二四

石橋忍月……………二五

魯迅……………二七

古典の作家

旅の人……芭蕉……………二五

美の饗宴……蕪村……………三〇

悲哀と創造……一茶……………三七

作家論

伊藤信吉著

作家の世界

作家の紀行

作家の手になる幾篇かの紀行を讀んで、私は旅をゆく人の心理と、そこに描かれる時空の経過に思ひをさそはれた。旅は、もともと實體を持たぬ経過である。さういふ時空の流れのなかで、作家達はおの旅の觀念を設け、時空のうつりに屈折と色彩をあたへてゐる。紀行文の興味とは、ここに生れるロマネスクな表情を見ることである。

半生をほとんど旅につひやした芭蕉は、それだけに、旅の觀念のとらへ方を確實にしてゐた。

「奥の細道」の冒頭に、「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり、船の上に生涯をうかべ、馬の口をとらへて老をむかふ者は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやます……」と述べたのは、

旅立つ人の感慨であるとともに、旅に「道」の觀念を設けた人の言葉だつた。

芭蕉にとつて、旅と自然はひとつの「道」であり、「道場」だつた。そしてここには、生の不斷の流れが、旅の經過に象徴されてゐる。近世に於けるすぐれた詩人の諦念への、熱意をひめた態度がここにある。芭蕉の作品に見る象徴的な手法が、單に藝術的方法の域に止どまらず、生の觀念に結びつくものであることがここに知られる。そしてこの途は、旅の觀念を極度に深化し、寂然とした境地につらなつて、美意識の一つの傳統を描いた。

歐洲へ向つての航路の途次、高濱虚子氏は、「印度洋月は東に日は西に」といふ一句を設けてゐる。この句は、見方によつては不埒であるが、作品の結構の不埒さは、最初から意識されてゐたに違ひない。それよりも、この句は詩人のどんな心理を語るのか。

豫想される非難をかへりみず、この句を設けねばならなかつた高濱氏の心理は、おそらく作品の結構についての顧慮を突きぬけたものだつた。そこに東洋の詩人が、意識の底を流れる詩的傳統を洗ひ出し、おのれの座を脱けはせぬとの氣持を思ふことができる。そのとき、高濱氏の置かれた位置が、歐洲へ向ふ印度洋のただ中であつたことを思ふべきである。

その折の旅で、高濱氏は日本詩の傳統を西歐の詩人たちに紹介し、各地の在留邦人と句會を催

した。それらの講演や句會は、社交的な催しに過ぎぬ印象をあたへ、旅の觀念の組立てなど、殊更には關心しないやうな、漠然とした紀行を綴つてゐる。

ここに言ふ、漠然とした態度とは何だらうか。それを私は、詩的傳統の強みに、いつさいをゆだねた人の位置と思ふ。その傳統の意識すら、抒情圈へ一般化した詩人の態度である。「印度洋月は東に日は西に」と創意を斷ちきつたところに、傳統の詩的情操は語られ、すべてを傳統のつよみにゆだねた人の旅の態度がある。西歐の詩人たちに、季感の意味を講演してゐる高濱虚子の姿を思ふことは、傳統の形をもつて、東洋の詩的情操が提示されたことを思ふにひとしい。自分の手で、旅の觀念を組むことをしなかつたこの詩人は、美の傳統に縋ることによつて、それを旅のしるべとした。

同じ途を行つた芭蕉が、幾たびかの旅にどれほどの思念をこめたかが、今にしてきびしく追懷される。

*

島木健作氏の「滿洲紀行」は、作家の内なる欲求を支へとして綴られてゐる。地圖は移り、異

る風俗と風景のひらけると、紀行を綴る人の態度はいつも同じ針路を辿つてゐる。針路を示す決意が、不變にその羈旅をつらぬいてゐる。

かはることのない態度を持し、その姿勢を崩さぬかたくなな構へは、この作家にあつては目新しいことではない。「生活の探求」この方、人生の眞實をさぐるといふ一筋の途が、島木氏の行手にはひらけてゐる。「滿洲紀行」の態度は最初から決定されてをり、紀行は述志の手段と言へる。それは求道者が踏むところの、欲求と體驗の段階である。

旅が作家の欲求の表現に他ならぬ場合を、私は、幾人かの作家の紀行に見た。

「奥の細道」の冒頭の言葉に、芭蕉がある人生的な意味をこめてゐただらうことは、詩人の生涯とその文學道程を追つてみれば、たやすく推し測られる。若かつた日の放埒から、年齢を加へるごとに深められて行つた思念は、動搖つねなかつた人の生の意識の途筋を語る。

この旅が、芭蕉のどんな生活條件から割出されたかは知らぬけれど、出立の言葉は、まさしく人生的な思念の量を、紀行の背後にうかがはせる。「漂泊の思ひやます……」といふ言葉が、單に旅への誘ひに過ぎなかつたとすれば、かうした感慨は生れなかつただらう。「古人も多く旅に死せるあり。」と、一應は自己否定に近い言葉を述べてゐるが、先人の途を追慕するのみでは、芭蕉の

途はひらけなかつたのである。

島木氏が「滿洲紀行」を支へた態度も、主として人生的な意味をこめた旅の觀念の設定だつた。すべての紀行は、作家が設けた旅の觀念の反映である。

徳富蘆花に於ける基督の聖地巡禮が、夏目漱石の「倫敦塔」が、永井荷風の「あめりかだより」「ふらんすだより」が、また島崎藤村の「佛蘭西紀行」が、西歐の旅といふ聯關性をもつて、私の思ひに浮んでくる。それぞれ、何と違つた表情だらう。そしてこの違ひは旅の條件の差異ばかりでなく、旅の精神——設定された觀念の差異である。

實體を持たぬ旅の経過が、その實、意識の充満と、心理のもつれを描きながら過ごされてゐるとき、それに氣付いた旅人はどんな表情をするのか。郷愁とは、外部の刺激に絶えず反應する意識の、不自然な堆積がもたらす嘔吐感ではないか。

「妻は、徒然のあまり、隣室に具へつけられてゐるピアノを、ひそかに弾いた。宿の母子はその使用をいやがる様子も見せず、むしろ面白がつてゐた。」パリの宿で、正宗白鳥氏はこんな風な郷愁を感じた。

これは、かならずしも強ひられた意識の過剰からくる嘔吐感ではない。郷愁といふものには、

こんな表現もある。それは人間生活は、到るところ平凡であるとの断定である。かうした断定が巢くつてゐるとすれば、その際、郷愁とは澁面に他ならない。正宗氏の「思ひ出すまゝに」といふ歐洲紀行は、全體がこんな風に澁面してゐる。旅を人生的決意の表現とするやうな、さうした逼迫はない。

「父上、あなたの御生涯のなやましかつたやうに、私の半生もなやましいものでございました。私の心は暗うございました。私は動くことによつて、わづかに自らを救はうといたしました。」フランスへの旅に際して、このやうに、島崎藤村氏は先づ生の意識を旅の觀念とした。若い日から旅と漂泊を幾たびか味はつたこの作家が、歐洲への旅に、生の流れと旅の意味をつらねたのは當然だつた。それにしても、動くことによつて自らを救はうとしたといふ逼迫は、この途と行爲にのみ轉生があるとの、切實な祈りを思はせる。精神の危機をはらんだ航海の、寂寥と危惧のふかさは人の思ひを衝つ。

フランスへの旅は、島崎氏の苦惱の歩みだつた。それは再生の希ひをもつて、祈りに似た言葉で綴られてゐる。旅よりほかに救ひはないと意を決した人の、絶對の立場から「海へ」「佛蘭西紀行」二巻は熱く綴られた。そのとき、旅の觀念は、生の意識とひとつだつた。多くの作家の西歐

紀行のうち、かうした祈りの切實さを、他に聴くことはできない。

「むしろ風に誘はるる雲のやうに、廣々とした海の方へ出て、そこにある日光を浴び、そこにある潮風に吹かれないと願つた。」これは島崎氏の南米紀行たる、「巡禮」の冒頭の言葉である。

この言葉と、さきの「海へ」の歎きとを比較してみるがよい。同じ海外紀行ながら、二つの文章はまるで違ひ、ここにはどんな逼迫もない。精神の危機の痛切さから脱けた作家は、同時に旅を生の觀念とする態度から脱け、「巡禮」の旅は南米各地に生活する邦人移民の、はげしい運命に眼をそそいでゐる。紀行の視野は、内から外へ移つた。そこにこの作家の、生の觀念の推移を知ることができる。

・*

「私はこれらの文章を一貫して、一つの精神があると思つてゐる。私は一つの態度を持してをり、私には自分の意見がある。そして私は日本の文學者によつて書かれた多くの旅行記に缺けた性格をその點に見出すものなのである。」「滿洲紀行」の序文で、島木氏はかう言つてゐる。

そしてここに收められた文章は、いはゆる紀行文らしい味はひを含んでゐないし、旅の印象の

興趣など、どこにも書かれてゐない。それは新しく拓かれた土地に、農民の運命を見ようとする欲求を生々しくしてゐる。書かれた事柄はすべて開拓地の實狀であり、その經營の實態、將來への豫測、島木氏の意見と、一種の調査報告に近い。

序文の一節は、さらに、「私のものを見る角度は、單に心理的であることはできなかった。」と、文學者に於ける旅の節度に言ひ及んでゐる。しかし島木氏にとつて、そのやうな顧慮は決定的な意味を持たない。「生活の探求」この方の態度からすれば、文學者の節度といふ限定は、とうてい行はれぬことである。節度の反省や紀行文としての興趣を圖ることは、この作家には許されてゐない。展けてゐる一筋の途として、人生的な思ひを焚く作家は、その足で踏みしめた土地の記録を綴るばかりである。それなしに、「滿洲紀行」一卷は成立たなかつた。

およそ、島木氏に於ての旅の觀念は、觀念としての範圍に止どまつては意味をなさぬ。觀念の組立ては、欲求と實踐にむすばれた求道であり、求道は實踐をよぶ。

實踐といふ言葉は、ここで創造と翻譯することができ。普通に紀行の興趣と言へば消耗と同義なので、島木氏はそれを肯じなかつた。一筋の實踐として旅を意識し、それを創造の糧としたのである。ジイドの言葉をひき「心理的であることはできなかった」と言つたことの中には、そ